



学校のシンボルとなっているドウイノ城は、紺碧のアドリア海に面している(2002年)



リルケは1922年に「ドウイノの悲歌」という詩集を完成させた。学校の裏手には、リルケの記念碑と、海岸線に沿ったリルケの小径(The path of Rilke)と呼ばれる散歩道がある(2002年)

きは、何となく格好が悪い。一期生だったの
で先輩の日本人がいらない私は、生活の細々し
た疑問を誰かに聞く度胸もなく、手探りで学
校にとけ込もうとした。

しかし、「若い」ということは、それだけ
で新しい世界を創造する力を持つものである。
さまざまな葛藤を乗り越え、ときにはぶつかり
合いながらも、生徒たちは次第に互いの歴史
や文化の違いを受け入れていった。授業や
課外活動を通して、ローマやイタリア国内の
各都市に独自に育まれた文化・歴史・芸術を
肌で感じ、そして自分の内面に取り入れてい
った。

振り返ってみるとそのときは、未知の世界
に踏み込むということ、そして集団が社会
としての姿を形成する間におこるさまざまな
喜怒哀楽を、体当たりで経験していたのだと
思う。

財産となった、人との つながりをつくるスキル

帰国後は日本の大学に進み、バブル経済の
頂点の頃、日本興業銀行に就職した。その後
も外資系金融機関などで働き、現在では大学
院で研究に携わりながら、経営コンサルティ
ングとコンテンツ制作に携わる会社(個人会
社)を運営している。

企業勤務時代は、インド・タイ・中国・ブ
ラジルなどの途上国におけるインフラ設備や、
カタールの天然ガス開発などに携わった。企
業文化の違う会社の業務提携や合併に関わる
仕事も経験した。これらは、文化の異なる国
家の政府役人や、企業文化の異なる会社の人
たちとのハードな交渉を伴うものである。

異文化の人たちとのコミュニケーションで
は、常にA Dの始まりと同じプロセスをたど
る。相手がど

のような文化
の人であれ、
立場であれ、
さらにはどの
ような人格で
あっても、相
手のどこかに
自分とのつな
がりを見いだ
せば、心を通

じさせることができる。英語では論理的に、
イタリア語ではむしろ感情を素直に出して、
コミュニケーションをとるのが良い。このス
キルは、私がA Dで試行錯誤を繰り返しながら
学んだ、かけがえのない財産である。

ちなみに、私の会社は「Dimmi(ディンミ)」
という社名だが、これはイタリア語で「私に
話してごらん」という意味の言葉である。日々
の出来事に一喜一憂する私に、ときおりイタ
リア人の友人が「Dimmi」と話しかけてく
れたことが、どんなに嬉しかったことか。人
の話聞く、これがコミュニケーションの、
そしてビジネスの原点であると信じている。

思い出は、「かえるの合唱」の 輪唱とともに

さて、今でも忘れはしない一九八四年五月
下旬のA Dの卒業の日。卒業生全員は、ドイ
ツ民謡の「かえるの合唱」をそれぞれの母国
語で歌い、そして心をつなげて輪唱した。
英語の歌詞、イタリア語の歌詞。そして、ア
ラビア語や中国語もある。もちろん私は、日
本語で。私たちは、混在する歌詞での合唱を、
朽ちることのない記憶として刻み込もうとし
たのである。

「ケケ、ケケ、ケケ、ケケ、クワ、クワ、ク
ワ」——二年間を共にした生徒が、二度と一堂
に集うことがないだろうという、この上ない
寂しさをかみしめながら。

体当たりで相互理解を深めること、心を一つにするということ

UWCアドリアティック校(A.D.)留学(一九八二～八四年)。一橋大学経済学部卒、同大学大学院修了(経営修士「金融戦略MBA」/経営法修士)。東京大学大学院博士課程在籍。日本興業銀行、外資系金融機関、外資系コンサルティング会社、M&AアドバイザーのGCAを経て現在にいたる。主な著書に、「これからの「知的財産」徹底活用法」、「エコノミストの仕事術」、構成協力として「ビジネス数学力を鍛える」(グロービス著)、などがある。

一九八二年九月下旬、UWCアドリアティック校(A.D.)は、ヨーロッパ・ホテル(Hotel Europa)で開校した。紺碧のアドリア海に面した、現在のA.D.のシンボルとなっているドゥイノ城(Castello di Duino)から車で二〇分ほど、トリエステ側にある小さなリゾートホテルである。

▶ A.D.一期生として驚き、とまどい、そして喜び

第一期生として集まった生徒は、約三〇カ国から一〇〇名程度。イタリア人が約三分の一、英語圏の人が約三分の一、そしてイタリア語も英語も母国語としない人が残りの三分の一という構成だった。

dinni代表取締役

小関珠音

おせき たまね



開校時にヨーロッパ・ホテルに用意されていたのは、黒板とチョークだけ。授業はすぐ行われたが、理科系の授業のための実験器具はなく、図書館がない。課外活動のためのポーターやウェットスーツなどの器具や設備もない状態だった。

生徒の中には、宗教の定めにより、豚肉を食べない人がいれば、牛肉を食べない人もいる。土曜日になると教会に通うキリスト教の生徒がいれば、一日五回にわたってアラームの神に祈る生徒もいる。イスラエルの女性は、卒業したら兵役に服すると言っていた。当時は同じユーゴスラビアという国であったセルビアとクロアチア出身の生徒が、民族の違いからか、ぎこちない会話をしている。生徒一

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四一七名の卒業生を輩出している。

人一人が自国の事情を持ち寄ったのは良いのだが、それぞれがどのように他の文化の生徒と交わるのか、よくわかっていなかったのだ。今、隣に座っている人が、なぜ笑ったのか、またなぜ怒ったのか。どのような価値観があって、今の発言にいたったのか。それまで自国で培った感覚では、お互いのことがよく理解できない。しかし、どことなく心が通じるときには、嬉しい気持ちになる。

驚き、とまどい、不安、そして、笑いや喜び。これらがA.D.の、そして私の二年間の留学の始まりだった。

▶ イタリア文化を内面化しつつ、UWCが形成された

またA.D.は、イタリアという文化とも深い接点がある。

食事はパスタを中心とするイタリア料理で、正式な食卓にはたぐさんのフォークとナイフ、そしてワインが出ることもある。外国人は、イタリア人のように上手くスパゲッティを食べられない。イタリア式のキスの挨拶を真似してみるのだが、タイミングがあわないと